

今週の為替相場見通し(2022年10月17日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		145.25 ~ 148.86	148.79	145.00 ~ 150.00
ユーロ	(ドル)		0.9632 ~ 0.9908	0.9723	0.9500 ~ 0.9900
(1ユーロ=)	(円)		141.00 ~ 144.80	144.54	142.00 ~ 147.00
英ポンド	(ドル)		1.0925 ~ 1.1380	1.1178	1.0900 ~ 1.1300
(1英ポンド=)	(円)	*	159.73 ~ 167.29	166.35	164.00 ~ 169.00
豪ドル	(ドル)		0.6170 ~ 0.6379	0.6203	0.6150 ~ 0.6300
(1豪ドル=)	(円)	*	90.85 ~ 93.55	92.24	91.60 ~ 93.10

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 山岸 寛昭

(1)今週の予想レンジ: 145.00 ~ 150.00 円

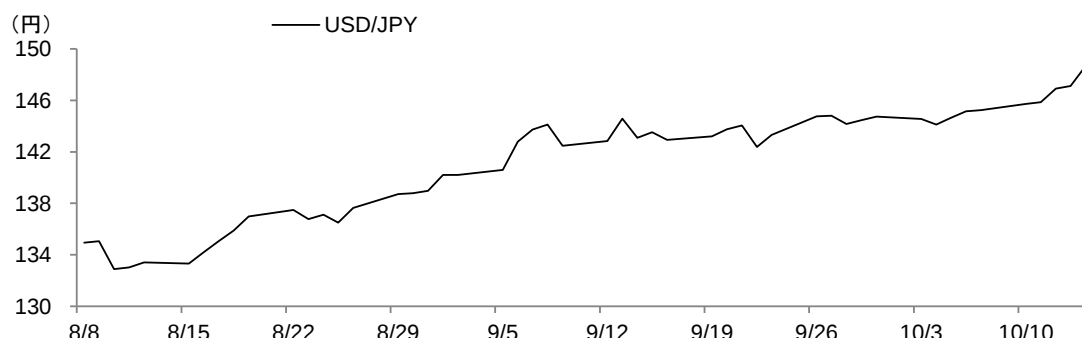
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は週後半にかけて急上昇、年初来高値を更新。週初10日、145.45円付近でオープンしたドル/円は週安値の145.25円まで値を下げるも、先週末からのドル買いの動きが継続。東京や米国が休日の中、145円台後半までじり高に推移。11日、ドル/円は米金利の動向を見ながら、145.70円付近を中心に揉み合い推移となった。12日もドル買いの流れが継続。海外時間では、米9月PPIの市場予想を上回る結果や黒田日銀総裁の金融緩和堅持の発言を背景にさらにドル買いが加速、147円手前まで続伸した。13日、ドル/円は146円台後半で小動き後、海外時間では米9月CPIの強い結果を受けて、FRBによる金融引き締め継続を織り込む格好で米長期金利が急上昇すると一時147.66円をつけ、年初来高値を更新。その後は介入警戒感からすぐに1円超急落したが再び147円台前半まで値を戻した。14日、海外時間に騰勢を強めると前日つけた年初来高値を再び更新。米10月ミシガン大学消費者態度指数、期待インフレ率が市場予想を上回る強い結果となり148.86円まで上昇し、148.79円で越週した。

今週のドル/円は堅調な推移を予想。日米金利差を背景としてドルが買われやすい展開が続くそう。足許の米景気は総じて好調さを維持。米9月雇用統計では、失業率3.5%と1953年以来の低水準となり、雇用がタイトで賃金上昇圧力が強いことを確認。アトランタ連銀のGDPナウを見ると、米10~12月期GDP(10/14時点)は2.8%と潜在成長率2%を上回る状況。12日公開された9月FOMC議事要旨では「金融引き締めが弱すぎるのと厳しすぎるのでは、弱すぎる方がコストは高くなる」と強調、物価上昇に制御が効かなくなるリスクを意識して、インフレ抑制最優先の姿勢が続くそう。従って、来年初めにかけて4%後半~5%付近まで市場織り込み通りのFF金利引き上げが続き、ドルが買われやすい地合いが続くとみる。日銀については、9月の金融政策会合後会見で黒田日銀総裁は、賃金が上がって物価も上昇するという好循環は作り出せていないと説明。さらに来年・再来年も難しいとの発言からは、緩和縮小は期待できず、金融政策からの円売り地合いは当面変わりそうにない。但し、輸入物価主導とは言え、9月東京都部コアCPIは2.8%上昇と増税を除く30年ぶりの高水準、かつ今後も上昇が予想され、黒田日銀総裁が従来通りのスタンスを貫くのか28日金融政策会合後の記者会見など今後の発言が注目される。上値目途は1998年高値を上抜けたことで明確な水準が見えづらいなか、節目の150円ちょうどが意識されそう。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/10~10/14)の値動き: 安値 145.25 円 高値 148.86 円 終値 148.79 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 甲斐 貴之

(1) 今週の予想レンジ: 0.9500 ~ 0.9900 142.00 ~ 147.00 円

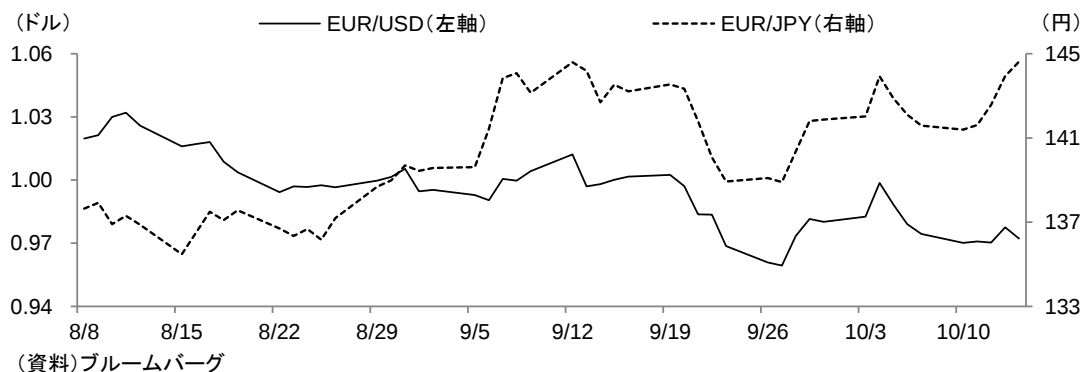
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は週後半に乱高下した。週初10日、0.9735付近でオープンしたユーロ/ドルは0.97台半ばまで上伸も、先週末の米9月雇用統計の結果が材料視されてドル買いが強まり、0.96台後半まで値を下げた。11日、ユーロ/ドルは欧州株の冴えない動きに0.96台後半まで値を崩したが、米金利が下落に転じたことでユーロ買いが強まり0.97台後半まで反発。その後はベイリーBOE総裁のポンド安への緊急国債買い入れ措置終了発言に英ポンド売りが加速し、ユーロ/ドルも連れ安となって0.97台前半を上値の重く推移した。12日、ユーロ/ドルは0.97ちょうどを挟んでの方向感に欠ける値動きが継続。一時上値を伸ばす場面も見られたが、その後はFOMC議事要旨のタカ派な内容にドル買い優勢となり0.96台半ばまで下落。売り一巡後は下げ止まり、0.97ちょうど付近まで値を戻した。13日、ユーロ/ドルは強い米9月CPIの結果を受けて、一時週安値の0.9632まで急落も、米金利上昇の一巡と欧州株持ち直しに0.9806まで急上昇と値動きの荒い展開となった。14日のユーロ/ドルは、ポンドに連れ高する形で週高値の0.9808まで上昇するも、その後上げ幅を縮め、0.9723で越週した。

今週のユーロ/ドル相場は引き続きユーロ安地合いの継続を予想する。先週金曜日にBOEによる英国債の買入介入が終了したこともあり、見直しが進む英政府による減税政策の動向には留意したい。トラス新政権が打ち出した減税政策をどこまで修正できるのかは注目だが、見直し後の内容が市場に受け入れられなければ、改めて英国国債利回りが上昇し、ポンド売りにつながる懸念もある。その場合には、ユーロも連れ安する可能性には留意したい。また、20日(木)発表予定のユーロ圏8月経常収支は、前回7月が過去最大の赤字幅だったこともあり、赤字幅更新となった場合にはユーロ安が一段階進展する可能性もありそうだ。今週は18日(火)に独10月ZEW景気期待指数、19日(水)ユーロ圏9月消費者物価指数(確報)、20(木)にユーロ圏8月経常収支、21日(金)にユーロ圏7月消費者信頼感指数(速報)が発表予定となっている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/10~10/14)の値動き: (対ドル) 安値 0.9632 高値 0.9908 終値 0.9723
(対円) 安値 141.00 高値 144.80 終値 144.54



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.0900 ~ 1.1300 164.00 ~ 169.00 円

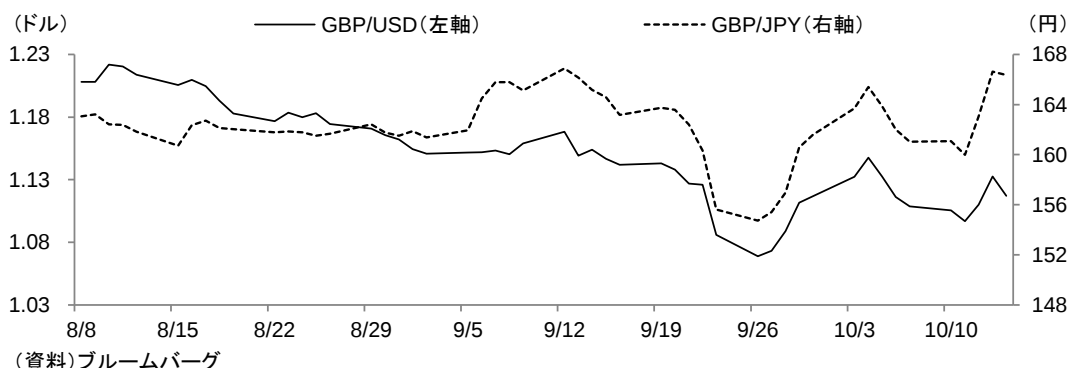
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、主要通貨に対し全面高。週明け10日は日米市場が休日だったこともあり穏やかな滑り出し。翌11日の乱高下は、まず、英中銀による英長期国債市場支援策が延長されるとの一部観測報道を受けたポンド上昇が先行。その後、英中銀ベイリー総裁が、当該支援策は当初の予定通り14日までに終了すると明言。この発言を受け、小康状態にあった英長期国債価格は再び急落（利回りは急騰）、ポンドも急反落した。ポンドは、同日中に対円で159.71円、翌12日までに対ドルで1.0905、対ユーロで0.8865とそれぞれ週の安値まで下落したものの、その後は英長期国債価格の底打ち反発と並行して、ポンドも堅調に転じた。英長期国債価格の反発は、13日に前後して広がった英財政政策の方向転換観測を好感した値動きと考えられた。9月23日に発表された補正予算に盛り込まれた財政拡大策のうち、高額所得者向け上乗せ税率（45%）撤廃は既に撤回されていたが、更に、来年4月に予定されていた法人税率引き上げ（19→25%）の撤回も撤回されることが観測された。財源を国債追加発行に頼った巨額の財政拡大政策が英国債市場の崩壊とポンド安とを招いた経緯に鑑みれば、増税撤回の撤回は英国債市場とポンドの安定に資する判断と受け止めることができた。実際、翌14日、トラス首相はクワテング財務相を更迭、法人税率引き上げ撤回の撤回を発表した。しかし、同首相の記者会見に前後して、英長期国債は再び下落、ポンドも前日からの上昇分をじわじわと吹き飛ばした。並行して進んだ円全面安を受け、対円では明確に水準を切り上げたポンドだったが、結局、対ドル、対ユーロでの上昇幅は、週を振り返って小幅にとどまった。

今週の英ポンド相場は、対円を除き、下落を予想。日銀の長期金利上昇抑制姿勢と米連銀の積極的追加利上げ姿勢が好対照をなしているのは明確で、主要通貨市場では円安継続を予想の中心に据えざるを得ない。仮に為替介入があったとしても、財務省/日銀による単独介入以外考え難く、その限りであれば、一時的な水準調整/時間稼ぎの域を出ることは考え難いだろう。ポンド安を見込むのは、14日のトラス首相記者会見に前後した英長期国債の値動きに、大きな失望が読み取れたから。上述の通り、同記者会見に前後して、英長期国債は明確に下落（利回りは上昇）したが、質疑応答を入れて僅か10分足らずの記者会見で、同首相は、一方で予想通り法人税率引き上げ撤回の撤回を発表しながら、投資促進による成長促進、高成長による税収増という自らの財政政策モデルに拘泥。「市場の過剰反応が足元混乱の原因」と言わんばかりだった。燃料補助金による物価抑制策と減税（増税撤回）以外の成長戦略、財源手当ての具体的方法、一連の政策実施を反映した経済見通しなどは全てハント新財務相が10月31日に発表する予定の中期財政計画まで先延ばしとした。今週以降、英中銀による長期国債市場支援策が切り上げられるのと並行して、英金融市場は2週間以上先行き不透明感にさらされることになる。不安にさらされ、不満を抱いているのは保守党内部も同様で、保守党議員の一部からは、既に、首相退陣、統一党首（首相）候補選出（実施に数か月を要する党首選を避けるために、候補者を一人だけ立てることで党内を調整すること）を目論む動きも漏れ聞こえてきている。そうなれば、最終的にスナク元財務相が首相に就任、財政政策を根本から立て直す可能性も考えられなくはないが、その場合でも、当面、政局の混乱は避けられないし、ここまで信頼を失った保守党の財政政策運営が、党首を変えただけで元通りの安定を取り戻すとは考え難いだろう。最悪の場合、首相退陣、総選挙突入という可能性すらも完全には除外できない。安心して英国債やポンドを買える日が訪れるのは、当面先のことになるのではなかろうか。

(3) 先週末までの相場の推移

先週（10/10～10/14）の値動き: (対ドル) 安値 1.0925 高値 1.1380 終値 1.1178
(対円) 安値 159.73 高値 167.29 終値 166.35



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.6150 ~ 0.6300 91.60 ~ 93.10 円

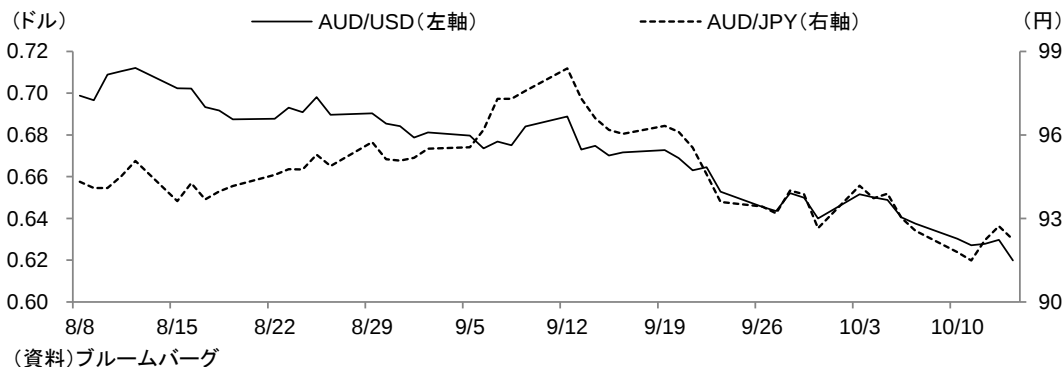
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は0.63台後半から0.62台前半まで下落。10日、先週金曜日に発表された米9月雇用統計が予想以上に強い結果だったことを受け、米ドル買いの流れが継続。ウクライナでの戦争激化等を巡る報道も重しとなり株価が軟調に推移する中、豪ドルは下値を追う展開となり、一時2020年5月以来となる安値0.6275まで下落した。11日、0.63ちょうど近辺で取引開始後、じりじりと売り進まれて一時0.6248まで下落し、2年半ぶり安値を更新。その後株価の回復を背景に一旦買い戻されたが、イングランド銀行(BOE)のペイリー総裁による発言を受けて金利上昇、株価が反落する中、豪ドルは再び下落に転じて0.6270近辺で引けた。ペイリーBOE総裁は市場での介入を予定通り今週末までに停止すると述べ市場を落胆させた。12日、エリスRBA総裁補は講演にて、豪州の中立金利はおそらく2.5%以上との見解を示し、豪国債利回りは瞬間的に大きく低下。午後になり「BOEが債券買い入れ延長を内々に示唆」との報道が流れると英ポンドが急騰し、豪債利回りが更に低下。豪ドルは一瞬上昇したものの大きな値幅は出ず、レンジ内の動きとなった。FOMC議事要旨では複数のメンバーが「引き締めペースの調整が必要」と指摘したことが示され、株価は一時上昇する局面があったものの長く続かず。豪ドルは一旦0.63手前まで買われたが、すぐに売り戻されて0.6280近辺で引けた。13日、米9月CPIの発表を控えて序盤は狭いレンジで小動き。米9月CPIではヘッドラインとともにコア指数が予想以上に上昇し、前年比+8.2%と40年ぶりの高水準を記録した。これを受けて株価は急落、米金利は急上昇、豪ドルは0.6170まで大きく下落した。その後、株価は急速に買い戻され、豪ドルも0.63ちょうど近辺まで戻して引けた。14日、序盤は株価の回復等を背景に買いが先行し0.6347まで上昇。クワテング英財務相辞任とのヘッドラインを受けて英ポンドが急落すると米ドルは続伸し、ドル/円は前日高値を上抜けた。NY市場時間に発表された米10月ミシガン大学期待インフレ率が予想を上振れると、米ドル買いが加速し、円は一時148.86円まで上昇した。豪ドルは下値を追う展開となり一時0.6194をつけた後、小幅買い戻され0.62ちょうど近辺で引けた。

今週の豪ドルは上値の重い展開を予想。今週は18日(火)ブロックRBA総裁補による講演、中国7~9月期GDP、20日(木)豪9月雇用統計の発表などが予定されている。豪9月雇用統計の事前予想は雇用者数が2万500人増加、失業率は3.5%維持となっている。今年5月以降のRBAによる連続利上げを受け、豪経済では住宅価格こそ急落しているものの、労働市場や小売売上高等は依然として堅調さを維持している。一方で、先週発表された米国側の指標では物価上昇率及びインフレ期待の上振れが見られ、FEDによる積極利上げを一段と後押しする結果となった。利上げスピードを落とし始めたRBAとタカ派継続のFEDのスタンス差を背景とした豪ドル安のトレンドは当面の間継続することが予想され、豪9月雇用統計の結果が余程大きく予想から離れない限り、相場への影響は限定的であろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/10~10/14)の値動き: (対ドル) 安値 0.6170 高値 0.6379 終値 0.6203
(対円) 安値 90.85 高値 93.55 終値 92.24



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。